

のであった。氏の質問と筆者の質問は同趣旨であると思うが、筆者はこれを真理論一般の場面から提起したわけである。

意見

クラウド・リーゼンフーバー

人間は、概念を通してどのようにして、またどれほど物を認識できるかという問題は、オッカム解釈において重要な位置を占めている。オッカム自身が、それに関する多くの説を吟味した結果、最終的な解釈を読者に任せたり自分の解釈を蓋然的なものに過ぎないとし、それを変えてもいることから分かるように、概念の問題は「オッカムの体系において数少ない不確かな領域の一つ」(G. Leff)であろう。その問題に関する彼の見解の変遷を目安にしてオッカムの著作の執筆順序を見定めようとする試みすらもある。しかしオッカムにとって、概念がプラトン主義的に精神の外に存在するのでも、言葉のようにただ唯名論的な規約による表示でもないことは不動であった。

オッカムによれば、概念は、精神の内-inに在りながら精神の外に在る物を自然に示すとされるが、もし清水氏の発表にあったように、概念を物の本性と比すことができないとするならば、概念が果たして物を指すのか問題になるであろう。なるほど、概念が物の本性を表さないということは、いろいろな意味で考えられよう。たとえば、普遍概念は抽象的であり、その普遍性が物にないことは言うまでもない。けれども、オッカム自身も言うように、概念においてもその抽象性・普遍性は意味内容に即しているのではなく、表識の様態に過ぎないのであり、そこから概念の意味内容に存在論的な妥当性がないと帰結することはできない。オッカムによれば、すべての認識と概念構成は個物の直覚知から始まり、それに基づいて抽象が進むにつれて、より高次でより普遍的な種概念や類概念が得られるのである。物の側に、種や類に対応する本性の区分を認めるべきか、という問題をここで論じる必要はないが、抽象によって概念の内容そのものが変わらない以上、直覚知から出発する普遍概念は、物の在り方を表すはずであると思われる。また、同じ物を様々な異なる観点から認識することができ、従って同じ物を意味する多くの概念がある、ということもできるが、この可能性は物の本性に備わる様々な特性 (propria) を認識することに

よって十分に説明されるのではないだろうか。概念の意味内容とその表識の様態、また物の本性と特性を、たとえばトマスのように区別するならば、そこから概念の存在論的な妥当性は否定され得ない。

オッカムは『命題集註解』において、明確には主張しないながらも概念を *fictum* として捉え精神における客観的存在を認める説に傾いているのに対し、後に書かれたと思われる『任意討論集』・『論理学大全』・『自然学問題集』においては、*fictum* としての概念を否定し、概念が記号であり、認識行為に他ならないことを主張した。それにより、なるほど概念を物と認識行為の間に入る第三のもの、精神の内に閉じ籠ったそれ自体で志向対象となるものであるという説は克服されているが、反面そこには、精神における概念の客観的存在を排除するあまり、記号としての概念の内にあり、物の本性を表しながらそれとは異なるものとしての志向的意味内容を、ただの指示関係へと単純化してしまう危険があるのではないだろうか。つまりその場合には、概念と直覚知とを区別できないことになるはずであると思われる。しかし、オッカムに従って、概念が物を指し、異なった物を概念によって正当に区別して考えることができる、とするならば、概念には何らかの意味内容が備わっていないかならぬと思われる。仮にそうでないとするれば、物が人間の前に現れていない時、概念は無意味なものになる。更に、もし概念の意味内容が物の在りかたに対応していないとするれば、物を概念に基づいて判断する可能性は成り立たなくなろう。しかし、実際に私達は常に概念に基づいて総合的な判断を形成しており、それによって生活は支えられている。たとえば、「彼は人間だから尊重されるべきである」という倫理的な判断が下される場合には、「人間」という意味内容に先天的総合的判断が下されているのであり、その判断は、人間に対する実際の態度を基礎づけるのである。即ち、目の前に現れていないものに対する判断と行為の可能性は、概念の意味内容と意味されたものの在りかたとの対応関係、つまり概念の存在論的な妥当性に基づくのである。とすると、オッカムのように概念の存在を認めるならば、概念を通して概念以前にある物の在りかた自体を把握することも、概念の意味内容と物の在りかたを区別しその対応関係を把握することもできるはずである。これは、概念が物の本性を表すのではなく、物を実践行為の対象として表す場合にも当てはまる。何故なら、物に対する態度は、物の在りかたについての認識に根ざし、それを

少なくともある程度で含むからである。概念が物の在りかたを表さないならば、他のものから区別してある物を指す、という概念そのものを形づくっている機能自体がなくなるのである。

概念の存在論的妥当性は、概念自体の在りかたとは何か、という問題と密接に関係している。つまり、概念は *fictum* のようなただの客観的な存在でも単なる指示関係でもあらず、物を表す志向的意味内容なのであり、そこにおいてこそ概念の本質そのものがあるのではないだろうか。